図書館報
# 光丘
No.154

## 将棋と読書と出版

公益社団法人日本将棋連盟
プロ棋士七段　阿部　健治郎

本を読むのが好きで、酒田市立図書館をよく利用している。機会に恵まれて、このコーナーを書かせていただくことになった。

最初に、簡単に自己紹介をいたします。

酒田南高校卒業後に上京して、十年間東京で暮らしたが、一昨年の五月に酒田市の実家に戻った。

現在は、仕事の度に電車と飛行機とバスを利用して、東京、大阪、山形県内陸部などを行き来する生活。月に十日以上は出張する。多いときは月の半分以上。

私は公共交通機関での移動を好む。最大の理由は、自分で運転しないため、読書ができるから。

読書は集中力を鍛えるに良い訓練でもある。

将棋の手を深く読むことと、通じる部分がある。

時間に追われて忙しく、ノイズが飛び交う現代において、意識的に集中することは大切なことだ。

将棋のプロ棋士とは何か？ 身分は？

厳密には公益社団法人日本将棋連盟に所属する会員で、プロの資格を持った者のこと。

ややこしいが、プロ棋士は会員でもあり、自営業者である。

プロになるための方法は何通りかあるが、今回は説明を省略する。

年齢問わず狭き門だ。

プロ棋士になると、スポンサーが主催する多くの大会(棋戦)に参加する権利を得る。

試合(対局)への手当て、賞金がプロ棋士の主な収入だ。それ以外にも、テレビやネットのイベント、大会審判、指導、執筆など仕事は多岐にわたる。

執筆には本の出版も含まれる。いままで将棋の本を二冊出版した。どちらもマイナビ出版から。将棋書籍を扱う出版社の中で、最大シェアを占める。毎月数冊以上、新刊を出している。

『四間飛車激減の理由』と『三浦＆阿部健の居飛車研究』。機会があれば、図書館で借りて読んで欲しい。

二冊とも、本編は難解だが、コラムは普通の人が読んでも楽しめると思う。

六年前の出版の経験を振り返ってみたい。

① 出版社の編集者から執筆依頼、打診。

② 本の目次と中身、何を書くか？編集者と打ち合わせをして、アイディアを編集会議に提出。

③ アイディアを試行錯誤、他の本とのバランスを考え、不都合がなければ、編集長からゴーサインが出る。

④ 原稿を書き始める。

⑤ ゲラを出して、間違いを正す。本のタイトルと表紙と帯を最終チェック。

⑥ 発売。店頭に並ぶ。

私の場合、①～③で一ヵ月半かかった。

『四間飛車激減の理由』は、一冊目ということもあり、気合を入れて書いたため、原稿の完成までに一年近くかかった。慣れていないため、編集者と数えきれないほど打ち合わせをした。

プロ棋士は本業の対局以外の仕事は基本的に苦手だ。

私は学生時代、小論文、作文が苦手で遅筆だった。

締め切りが近くなり、催促のメールが来る状況は精神的に辛かったことを今でもよく覚えている。

苦労して書いた甲斐があり、それなりに評価されて、売り上げも悪くなかったのは救いだった。

小規模ながら、チームで長期に取り組む仕事ならではの達成感があった。

将棋で勝つこととは違う、別の感覚だ。

二冊目を書き終えて以降も、定期的に新刊執筆の依頼がある。ありがたい話だが、負担が大きいので、その都度断っているが、断り続けるわけにはいかない。

『四間飛車激減の理由』の続編を書いてみたい。

技術書とは別に、将棋の歴史の本も書いてみたい。

# 和風文化の殿堂 出羽遊心館

元酒田市収入役 佐藤昭雄

昭和の時代が終わりに近づいた頃、酒田市長の文化団体から和風の文化を一つにまとめた会館を造りたい、しかも市の発祥地である川南地区に建設してほしいとの強い要望を市長が受けた。先に中央地区に完成した文化センターにもそれらしい施設はあったが、せいぜい畳の部屋がある程度であった。

酒田市長も相馬氏から大沼氏に変わり、川南地区には土門拳記念館、国体記念体育館等が完成。エプソンの操業、庄内空港の開港があって、短期間に大きな変化が見られた。

酒田市も和芸専用の施設を造るのであれば、市の迎賓館にも使用できる施設にしようとの声も大きくなってきた。

和風文化といっても大変な数である。踊り舞踊、書道、囲碁、将棋等があり、バラエティーである。これを統合的にまとめる建物の設計は和風建築数寄屋造りで高名な中村昌生博士（京都伝統研究所）を選定した。和芸の底に秘める「遊び心」を取り入れた建物の名前は「出羽遊心館」として川南文化ゾーンの中心的存在である。

正面玄関

その建物の室名も広いホール、畳敷き研究室（舞台付き）広間、本格的な茶室など大小八つの和室があり、徹底した和風にこだわった建築である。

敷地一万五千㎡の中に植栽と流れに囲まれた約一二三〇㎡の建物がそれであり、平成六年に完成した。

施工面で最も頭を痛めたのは用材の調達であった。幸いなことに金山町の特別な配慮により、樹齢二百年を超える杉の立木十本を分けて頂くことになった。酒田市や中村氏も現地を検材した。その結果、「赤味を帯びた杉の良材が確保」され、私の最大の悩みも解消されたとして、中村氏も満足した喜びであった。

また、柱の基礎となる根石類も、地元のものを使用するため、中村氏も日向川に出向き、川に入って自ら色、形、大きさ等をチェックしたが、実際に建物に使用されたのは、百個のうち一～二個だけだったとは施工者が語っていた。

小松の中に映える出羽遊心館、ホールに足を入れて驚くのは竹の網代編した優雅な天井とともに無節の杉材五寸（十五㎝）角が整然と並ぶ柱に圧倒される。金山町の好意がなかったら、この建物はできなかったであろう。

ホール

茶室は酒田三十六人衆をしのぶゆかりの名「泉流庵」として北端にあり、あたかも離れの茶室の感がある。

日本を代表する北山丸太は美しく、数多い銘木が随所に見られ、どんと踏むと響きのある甲高い音を出すのもこの舞台である。数多い銘木が随所に見られ、木のぬくもりと素朴な美観が館内に漂っている。

山桜や竹林に囲まれた庭園には静かな水の流れが二つの月美台で結ばれ、そこに置かれている「水琴窟」が心地よい音色を奏でて日本文化の情緒を醸し出してくれる。

日本文化の先端を担う京職人と酒田職人が一体となって「匠な技」を生み出した遊心館は、和風文化の殿堂にふさわしく、また酒田市の迎賓館としても利用されている。

建物の竣工直後、使用上であれこれ制限をつけて市民の不評を買ったが、今は利用形態も一般並みとなっている。開館前の特別見学会は中村先生が指導して行われたが、山形県建築士会からも大勢の参加があった。

工事が終わった時の中村先生は、「私はこれほどの質・規模の物件を手がけたことはなかった」、また設計に関しては「全部が完成するまで設計」という難解な言葉を残している。

（筆者の佐藤昭雄氏は、昨年八月十九日に逝去されましたが、その直前に当館報向けに原稿をまとめて執筆されていることから、継続して掲載するものです。）

# 駅前地区の成り立ち
## ～「酒田新聞」の記事より～

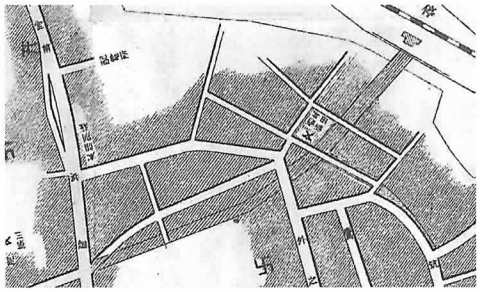
酒田市立図書館 副館長　岩浪勝彦

現在、酒田の駅前再開発事業が進められているが、今から百年ちょっと前、この場所はわずかの建物を除いて何もない場所であったことが昔の地図を見るとわかる。

初代の酒田駅舎は大正三年（一九一四）十二月二十四日に完成したものであるが、新庄酒田間の鉄道をひくにあたっては広い土地を必要としたことから、自然の成り行きとして、駅の位置は酒田のまちはずれに置かれることになったほか、線路が酒田町内を通るのも、臨港線の北千日堂前から先の部分のみであった。駅が置かれた場所は、当時の行政区域で酒田町ではなく、飽海郡西荒瀬村大字酒井新田である。大正十四年（一九二五）十月十四日に東宮殿下（のちの昭和天皇）行啓の際、当時の西荒瀬村長であった伊藤重治郎は、酒田駅は酒田町ではなく、西荒瀬村にあるという理由により、中里重吉酒田町長より先に歩いて殿下を先導したとの逸話がある（平成元年八月六日「荘内日報」荘司芳雄氏のコラムより）。

現在私たちが日々利用している駅前通りは、駅舎の完成する約一年前の大正二年（一九一三）十二月二日に工事許可が出されており、それまではあの道自体が存在せず、大正三年中に駅舎から祖父山下の十字路までをつなぐ駅前道路が新たに作られたことが「酒田新聞」や地図を見るとわかる。ちなみにこの通りを横切る2つの道路（駅前郵便局前の通り、ホテルイン酒田駅前の通り）は先に存在しており、これらの通りを縦貫するかたちで駅前の道路が作られたことにより、それまで一帯であった北水出、天王下、外野町は駅前通りの道路で南北に分断されることになった。

大正三年（一九一四）の地図を見ると、まだ駅前の道路が計画段階であり、駅の正面から酒井新田尋常小学校の脇を通って、八雲神社の方向に道を延ばし、祖父山下の十字路につなぐ計画となっており、その結果として、八雲神社の西側（あいおい皮膚科の向かい側）に現在も残る、奥行がない一見奇妙な細長い三角形の区画ができたことがわかる。この新たな道路は「寺町新道」と呼ばれ、戦後まもなくの地図にもその名が見られる。



大正４年頃の駅前付近

大正期の写真や地図をみると駅前に最初にできた商店の多くは運送店であり、そこに少数の旅館や待合所が混じっており、鉄道輸送に関連する事業所によってまちが形成されていったことがわかる。最も駅寄りの角には矢口旅館があり、その隣には中川屋支店があったほか、その向かい角には新庄酒田間の鉄道開通に伴い、本合海清川間の定期船が廃止され、交通の要衝ではなくなることが見込まれた清川から酒田今町に移転してきた酒田ホテル（渡辺旅館）の支店があった。

駅前には徐々に食堂や運送業者が立地し、大正期の絵葉書には仁丹や明治カルミン、胃活、クラブ白粉など、当時は一般に広く知られていた商品の看板が商店の壁に見られる。

また、佐藤三郎氏の北文堂（全国紙の「時事新報」専売所）も駅前に移転したほか、戦前の酒田を代表する新聞の一つであった両羽朝日新聞社も大正十五年（一九二六）十二月以降は台町から駅前（現在のホテルイン酒田駅前の南側）に移転した。

開業直後の酒田駅前

駅前の発展に伴い、人口の増加が著しい酒井新田地区では、小学校の児童数も大変な増加をみせ、酒井新田尋常小学校（昭和二十四年に松陵小学校に吸収）は明治四十年から昭和九年までの二十七年間に増築を八回行っている。

また、酒井新田の住民による酒田市との合併要望は、大正期に既に始まっており、昭和三年には酒田町に合併要望書が提出されたが、昭和十六年（一九四一）四月に同地区の酒田市への編入が実現するまでは西荒瀬村と酒田市との間で相当のやり取りがあり、昭和十年代の新聞には酒井新田地区の合併運動に関する記事が数多く掲載されている。

以上のように酒井新田の歴史は文字通り酒田駅前の発展とともに歩んできたといえる。

# ジュニア世代の短歌

酒田短歌会顧問　塚本　敞

短歌（みじかうた）は五七五七七の定型の詩である。

実作の要諦は定型を守ることが原則であるが、現代短歌では多少の字余りなど許されるようだ。声に出し詠んでみて滑らかなリズムに乗っていればさほど拘らずともよいようである。一番大切なことはその内容である。

日々の生活の中で、五感と通して心に響いた感情や心を揺する思念を大切に育て表現することであろう。そのための作業は言葉選びということになる。赤ん坊を育てるように時間をかけて完成された一首にするための努力が大切と思う。熟成させる作業である。

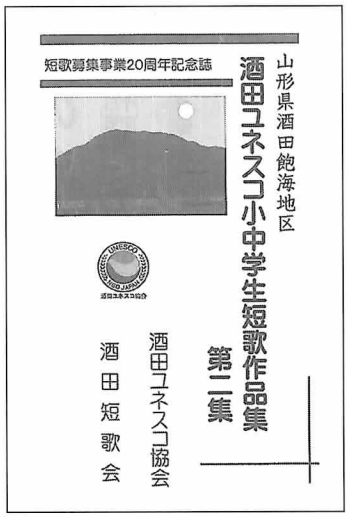
何を詠めばよいか歌材に困るという場合は自分で歌材（題詠）を課して創作を強いる作業もあると思う。何を詠めばよいかではなく、これを一首にしてみようという挑戦する気構えも大切と思う。

歌材はいたるところに転がっていると言われる所以である。

酒田短歌会がユネスコ協会と協力して日本の伝統文化である短歌を小・中学生にも継承してほしいと地区の学校に呼びかけ「ユネスコ短歌」の募集事業を始めて二十年になる。十年前に応募があった次の作品

・合しょうのよるのれんしゅう
　おわったら雲のかげから
　月がにっこり

松稜小学校二年　さいとう　ゆい




酒田ユネスコ小中学生短歌作品集

という入選作品があったが、当時の校長先生が作曲をして下され、「マリンジュニア合唱団」がそれを団歌として年ごとの発表会で今も歌い継がれていることは特筆すべきことであろう。

そのユネスコ短歌の直近の入選作の一部を次に紹介してみよう。

〈平成二十六年度〉
（第十八回）作品

・散歩道昔はぼくが手をひかれ
　今は手を引くおじいさんの手

亀ヶ崎小学校六年　阿部　健太朗

・今日もまたあなたの笑顔にいやされる片思い歴気がつけば六年

第二中学校三年　加藤　優花

〈平成二十七年度〉
（第十九回）作品

・赤とんぼ夕焼け空を飛び回り稲穂の上にかげ遊び合う

亀ヶ崎小学校五年　和島　弘次

・お姉ちゃん優しく進化しおかしいなうれしさ半分不思議さ半分

高瀬小学校六年　佐々木　悠輔

〈平成二十八年度〉
（第二十回）作品

・ペダルこぎとんぼといっしょにかけぬけるぼくがしゅんかん風になる時

田沢小学校六年　阿蘇　来夢

・散歩道日なたぼっこの雪すずめふっくら丸くぬくもりいっぱい

亀ヶ崎小学校六年　伊藤　綾花

さらに注目すべきは酒田光陵高校が東洋大学の「現代学生百人一首」の企画（毎年六万点前後の応募がある）に応募し、好成績を上げている実績である。

国語科の先生達が「国語表現」の時間に短歌を作る授業を展開し、作品を応募していると聞く。その努力が讃えられて先年大学本部より先生が学校を訪れ、学校特別表彰を与えられることとなった。

〈平成二十七年度〉
（第二十九回作品）

・祖父の背を流すと申し出る言葉のいらない男の会話

酒田光陵高校三年　斉藤　叶

・性格とピッコロの音共通点みんなと合わないチューニング♭B（ベー）

酒田光陵高校三年　佐藤　なつ美

・海岸で一人静かに釣りをするもうみられない地元の夕日

酒田光陵高校三年　保坂　陸斗

〈平成二十八年度〉
（第三十回作品）

・「大丈夫」母に言われた三文字を胸に抱いていざ面接へ

酒田光陵高校三年　太田　双葉

・「しわくちゃだ」並ぶ手の甲見比べる祖母の言葉に人生を知る

酒田光陵高校三年　後藤　綺

〈平成二十九年度〉
（第三十一回作品）

・決まったよ喜ぶ私と温度差が寂しさが増す母のほほえみ

酒田光陵高校三年　田中　日菜

# 常世田長翠と『長翠翁自筆句集』

酒田市立光丘文庫古典籍調査員　田村真一

光丘文庫にひときわ異彩を放つ句集がある。『長翠翁自筆句集』(ちょうすいおうじひつくしゅう)がそれだ。

作者は春秋派の俳人・常世田長翠(とこよだちょうすい一七五三～一八一三)である。長翠は晩年、酒田に永住した。酒田の旧家には長翠の句が多く残っているという。菩提寺は浄徳寺である。

春秋派は芭蕉・丈草・白雄と受けつがれてきた自分の考え方を絶対化する我執から解放された何物にも束縛されない自由な表現を意味する「寂(サビ)・撓(シオ)り・細(ホソミ)」の蕉風俳諧を理念とした。

長翠は下総国匝瑳郡(そうさぐん)木戸村(千葉県匝瑳郡光町木戸)の人である。江戸に出て春秋派宗匠・加舎白雄(かやしらお　一七三七～一七九一)に師事した。長翠の俳句の才は他を寄せ付けず、白雄の死に伴い門人三千人を有する春秋派二世宗匠に就いた。

だが、長翠には若い時分から漂泊癖があり、春秋庵宗匠の際も諸国遊行を繰り返した。俳句の才は卓越したものがあったものの組織を統括する能力が長翠には欠如していた。

春秋派宗匠の座を弟弟子の倉田葛三(くらたかっさん一七六二～一八一八)に譲り、武州本庄に移る。

その後、長翠は東北への旅に出て芭蕉翁の『奥の細道』ゆかりの地を訪ねた。

長翠が初めて酒田を訪れたのはこの東北行脚の年、享和元年(一八〇一)である。この時の酒田滞在は一ケ月におよぶ長きものであった。酒田では歓待をもって迎え入れられた。長翠の名声は酒田まで鳴り響いていたのである。この時、浄徳寺河道上人を主とする酒田俳人衆から酒田永住の強い勧誘を受けた。

河道上人は浄徳寺十七世で、俳諧を白雄に学び残露庵の号を有していた。

長翠は享和二年(一八〇二)十月、酒田に骨を埋める決心をした。

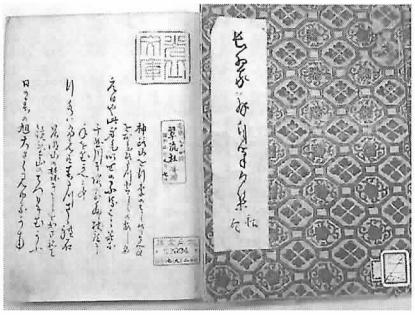
酒田では胡床庵(浄徳寺門前)に住し俳諧指導を行った。多くの人が長翠門下生となった。その代表格が以下の三人である。

本間家四代当主・本間光道、俳号美社李

酒田の豪商・柿崎孫兵衛、俳号左母理

酒田の商人・本城屋三郎兵衛、俳号桃吏

特に本間光道は長翠のパトロン的存在であった。



長翠翁自筆句集

『長翠翁自筆句集』は自身の作を選定してまとめた句集であり、酒田で編纂された。成立は文化年代と推定される。

上・下巻の二冊からなり春夏秋冬に分類されている。句数は春が七三一首、夏が四七六首、秋が七一六首、冬が五一二首、計二四三五首にのぼる。

江戸・春秋庵時代(一七九一～一七九四)、小蓑庵時代(一七九四～一八〇二)、胡床庵時代(一八〇二～一八一三)の長翠の句が網羅されている。

『長翠翁自筆句集』では百首あまりの句が改変されている。

同句集より抜粋し若干の句を左記に紹介する。

うら枯のいさごを焦がす芦火かな

たツ鴈の松過て羽をさだめたり

夕くれや馬の人みる梨子の花

飛島のかげもととめず秋の海

海千里ワたりいそふか神の鶴

花鳥よむかしハものを秋の色

星の夜の月吹きゆる白根かな

あすありて待宵の名の月夜かな

秋の日や雲のかげふむ橋のうへ

うら枯の鐘に夕日の届きけり

六月の水拝ミけり釜のろく

六月の風を見て居すすき哉

昼寝して夢のむかしをかたりけり

山のうへにかげるぞ秋の月

塵の世のちりにも似たり月の雨

月の雨山なき囹と嘘つけよ

鴈啼て風にみのいる野山かな

むやむやと見ゆるハ秋の葎かな

海わすれ山をわすれし名所かな

象潟は昼の露見るところ哉

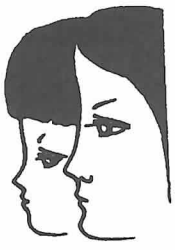
汐こしは鳥もとばずよ星月夜

象潟を見て来て六里后の月

浪ふみて行や秋田の秋の暮

日和山公園内にある石碑に刻まれている、人の柳うらやましくもなりにけり、の名句もこの句集に掲載されている。

長翠の句には春秋派特有の軽やかさがあり詠む者に清涼感を覚えさせてくれる。芭蕉の不易流行(ふえきりゅうこう)の世界を顕現しているように思われる。



# 読書感想文

## 一歩踏み出す勇気

酒田市立宮野浦小学校
五年　佐藤　晴飛

「がんばる」とは何だろう。今までぼくは何かに本気でがんばったことはあっただろうか。

「努力する」とか、「がんばる」という言葉はよく使われているし、大事だということも知っている。でも、好きかきらいかと聞かれたら正直きらいだ。なぜかというと、「めんどうくさい」や「つかれる」といった言葉がぼくの頭をよぎるからだ。しかし、ぼくのその考えが、この夏、一さつの本と出会ったことで少し変わった。

「オーロラの向こうに」は写真家の松本紀生さんが書いた本である。松本さんはオーロラ撮影の専門家だ。アラスカ旅行をきっかけに写真家を目指したらしい。毎年冬になると、オーロラの写真を撮りに北極圏に行く。オーロラが好きすぎて写真を撮ることがやめられないらしい。

しかし、オーロラはそう簡単には現れない。動物さえも住むことができないほどのきびしい山のふもとで、何日も何日も待たなければならないのだ。ぼくがこの本を読んでいて一番おどろいたのは、どんなに寒い思いをしても、一枚もオーロラを撮影できずに終わってしまうことがあるということだ。それでも、松本さんはあきらめずに毎年のようにオーロラを追い続けている。ぼくが松本さんの立場だったら、とてもがっかりすると思う。せっかく何日も待ったのに…。

オーロラの撮影に失敗した時、松本さんはこう考えるそうだ。

「何かをなしとげたかということよりも、どう取り組んだかということの方が大切なんじゃないか。」

ぼくは松本さんのこの言葉を読んで、結果よりも大切なことがあるということを学んだ。これまでのぼくは、正直、結果が出なければつまらないと考えていた。でも、オーロラが撮影できないかもしれない中で、自分にできる最大限の準備をする松本さんの姿を知り、ぼく自身も成長しなければならないと考えるようになった。

これから先、苦手なことや苦しいこと、努力しなければ達成できないことがたくさん出てくるだろう。そんな時、成功や失敗といった結果だけを考えるのではなく、結果にたどりつくまでに自分ができる最大限の努力をしたかということを考えるようにしたいと思う。

父がこんな言葉を言ったことがある。

「努力して成功したことは自信になる。たとえ失敗したとしても、次への肥になる。努力せずに成功したことはおごりとなり、努力せずに失敗すれば何も残らない。」

今ぼくは、体育フェスティバルに向けて応えん練習をがんばっている。応えん賞とパフォーマンス賞のダブル受賞をするために、六年生より大きくこれ以上でないというくらいの声を出している。思うような結果にならなくてもくいのない練習をしていきたい。

一歩ふみ出す勇気をくれた松本さんに感謝。

**《「オーロラの向こうに」**
**松本紀生著　教育出版》**
**第六十四回青少年読書感想文コンクール山形県審査会**
**小学校高学年自由図書の部**
**優　秀**

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

## 「光丘文庫デジタルアーカイブ」の完成・公開について

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

光丘文庫所蔵資料を活用し、「地域史への入口」をイメージして昨年四月から作成に取り組んできた「光丘文庫デジタルアーカイブ」が昨年十二月三日からインターネット上で公開されています。

公開から二カ月弱で既に延べ四千人の方々から閲覧いただき、総閲覧ページ数は五万ページを超えています。

これにより、初めて「酒田市史年表」が検索できるようになったほか、酒田の歴史上重要な資料の精細画像が閲覧できますので、ぜひ「ADEAC酒田」で検索してご覧ください。

光丘文庫デジタルアーカイブ

**【執筆者紹介】**〜〜〜

**阿部健治郎**（公益社団法人日本将棋連盟 プロ棋士七段）
**佐藤昭雄**（元酒田市収入役）
**岩浪勝彦**（酒田市立図書館副館長）
**塚本　敞**（酒田短歌会顧問）
**田村真一**（市立光丘文庫古典籍調査員）
**佐藤晴飛**（宮野浦小学校五年）

デザイン　佐藤十弥

発行　酒田市立中央図書館
酒田市立光丘文庫
酒田市中央西町二番五九号　電話(24)二九九六番
酒田市中町一丁目四番一〇号　電話(22)〇五五一番
印刷　明徴出版㈲